

本当に君は総理大臣になれないのか 著者の小川淳也さん

最大の問題は「持続可能性」

——本書では、いわば「小川総理の政権構想」が明らかにされています。小川さんは日本をどういう国にしたいのですか。

小川 いま時代は変わっています。しかし政治が変わっていない。その結果、社会が変わることができず、多くの人々が苦しんでいる。

それでは、政治を変えられるのは誰なのか。一義的には政治家ですが、最終的には国民です。私自身、政治家の一人として国民と一緒に政治を変えて社会を変えたい、政治の不在で国民がもがき苦しむ現状をとにかく何とかしたいという思いです。すでに時代は変わっています。

国ですが、それは日本人が日本列島の中で「土地や資源の有限性」を意識しながら生きてきた民族だからだと思います。「もつたいない」という言葉が世界的に注目されたように、私たちは有限性の中で生きる知恵と文化を持っている。

21世紀は人類が地球の有限性を意識しながら生きていかなければならない初めての時代ですが、今こそ日本の出番であるはずです。

日本のリーダーが国際社会の大舞台で、世界中の人々に向かって真正面から堂々と国際的な問題の解決を呼びかけ、「わが国はそのためにこういう役割を果たす」と訴えかける姿を見てみたい。日本は堂々と正論を唱え、正道を歩む国であるべきです。

人間の可能性に賭け続ける

——小川さんは本書で、政治家だ

これまでの世界では「右肩上がり」の時代が続いてきましたが、これからは「右肩下がり」の時代に突入します。すでに世界と日本は「人口減」「人口構造の激変（少子高齢化）」「エネルギー・環境問題」「国際政治の機能不全」という構造的な問題に直面しています。

産業革命以来、人類は地球の資源を浪費しながら「拡大成長路線」を突き進んできましたが、地球の限界にぶつかった今、「縮小脱成長路線」への転換が求められています。地球が有限である以上、無限の成長はありません。私たちは最も大切にすべき価値観を「成長」から「持続可能性」へ転換しなければなりません。ここで重要なのは、日本の危機は

けで国は変えることはできないと民主主義の重要性を強調しています。小川 コロナ禍を機に、中国のような専制主義に憧れる風潮が生まれています。しかし、専制主義は強権的な指導者の人格や能力に過度に依存する不安定かつ危険なシステムです。強権的な指導者は「英雄」にも「悪魔」にもなりません。

確かに民主主義は完璧な政治制度ではありませんが、かつてチャーチルが言ったように、それでも既存のどんな政治体制よりも良いものであると考えています。——同じ人間が行う以上、民主主義にも危険性が内在しています。小川 その指摘は、民主主義とポピュリズムの違いの問題につながると思います。

私の考えでは、理想の民主主義は人々の善意や良心、利他心といった「正の感情」に基づく政治であり、

本当に君は総理大臣になれないのか
小川淳也 中原一歩

「情義、義理、カバン」なし、野党で半分もいなくて、はは無名。なのに、「信濃の総理候補」として人気上昇中。自派「日本を良くする政策オタク」。永田町のアタマは「修行僧」。そんな50歳の消費代議士に、村瀬&村世野一切疑いの真動機をストレートに聞いてみた——



まったく新しい政治の本

「小川さん、持続可能な日本をつくるか言うけど、そんなこと本当に可能なんですか？しよせん、絵に描いた餅では？」

講談社現代新書

グローバルな危機に由来するということです。新型コロナウイルスに象徴するように、現代のグローバル化した世界では、もはや一国のみの平和と安定はありえない。世界の平和と安定がなければ、自国の平和と安定は得られないのです。

だから、まず日本が世界に先駆けて国内で総合的な改革を行い、持続可能な社会を実現する。その上で、日本のモデルを世界に向けてアピールして国際的な改革を主導する。夢物語だと思われるかもしれませんが、日本にはそれをやり遂げるだけのポテンシャルがあるはずですよ。古来、日本は調和を重んじてきた

ポピュリズムは逆に人々の怒りや不安、恐怖といった「負の感情」に基づく政治です。確かに怒りや不安、恐怖は着火しやすく瞬間的な爆発力がありますが、長続きはしません。それに対して善意や良心、利他心は着火しにくく爆発力もありませんが、一度火がつけばトロトロと自発的に燃え続け、容易には消すことができない。

民主主義とは、そういう人間の「善」なる可能性を信じて、それに賭け続けることではないか。人間という生き物の大きな特徴は、世のため人のために役に立つことに最大の喜びを感じる、他人の喜びを自分の喜びと感ずるということですよ。人間は自分だけが幸せでも、本当の意味で幸せにはなれない。だからこそ一人でも多くの人々が幸せになることを目指す、そのために自分から周囲へ「善」の灯火を広げていく

努力をやめてはならない。

だから民主主義を選ぶとは、「どの政治体制がいいか」という判断の問題ではなく、「我々は人間の可能性を信じる体制をとり続ける」という決意、覚悟の問題だと考えています。

こうして政治家と国民が強固な信頼を築いて本当の民主主義が実現できれば、できないことはないはずで、持続可能な社会を作り上げることだってできる。確かにハードルは高いかもしれませんが、その可能性に賭け続けたい。

「天意」を感じる瞬間

—— 小川さんはどうして、それほど世のため人のために一生懸命になれるのですか。

小川 私は30年近く「この国をどうしたらいいのか」と常に考え続けてきました。自分でもどうしてこんな

に必死なのか分からなかったのですが、「大欲は無欲に似たり」という言葉に出会ったとき、何となく腑に落ちたんです。

私は一人でも多くの人が矛盾や葛藤を乗り越え、お互い一緒にいられることを喜び合えるような社会を見てみたい。政治家と国民が信頼し合いながら、力を合わせて力強く歩んでいく日本の国を見てみたい。それが私の「欲」なんですよ。もしかしたらそれは、私が誰よりも強欲な人間だということなのかもしれません。

—— 小川さんは「天意」のようなものを感じることはありますか。

小川 私は毎朝、出勤前に目を閉じて「自分は何のために政治家になったのか」と初心を思い出すようにして、それは時に30分から1時間、2時間に及ぶこともあるのですが……そうして自己を空しくしていっ

た末に、天意のようなものを感じることもあります。

「人は天にして天は人なり」というか、多くの人々の切実な願いや切なる思いが集積され集約されていった果てに、天意や天命が合成されるのではないかと感じています。

そういう人々の思い、天の意思に応えるために、この身を使い切ることでさえできれば本望です。

(6月30日 聞き手・構成 杉原悠人)

小川淳也 (おがわ・じゅんや)

1971年香川県生まれ。東京大学法学部卒。自治省に入省後、政治家を志す。2005年に初当選を果たし、総務大臣政務官などを務める。2020年には小川の半生を追ったドキュメンタリー映画『なぜ君は総理大臣になれないのか』が話題に。著書に『日本改革原案 2050年成熟国家への道』(光文社)。

書評

編集部が薦める一冊



抵抗権と人権の思想史 欧米型と天皇型の攻防



豊島 教文館
3,300円

なぜ日本はこんな国になってしまったのか——というのが多くの人の偽らざる実感だろう。為政者は国民を尊重せず、にもかかわらず国民は為政者に逆らわず、むしろ為政者と同じように自分より弱い立場の者を虐げているような状況だ。

要するに、日本は人間を大切にしない国なのである。それは今に始まったことではなく、戦前から国民は国策の犠牲にされ、今もコロナ五輪の犠牲にされようとしている。

おそらく日本には「人間は人間であるだけで絶対に大切にされなければならない」という普遍的な価値観がないのだろう。日本の人権は絵に描いた餅で、国民が噛み砕いて血肉にした思想にはなっていない。

こうした「日本にとって人権とは何か」という問題を追求したのが本書だ。筆者は日本における人権の受容を「欧米型」と「天皇型」の二つが相克してきた歴史と見る。

「欧米型」の人権思想は「天賦人権」である。人権は神から被造物である人間に与えられた自然権であり、国家権力に奪うことはできない。だから人権は欧米で個々人の信仰を守るために国家権力に抗う抵抗権として発展してきた。国家権力より上位の超越的価値(神)があったからこ

そ、国家権力に抵抗するという思想が生まれたわけだ(第一部)。

一方、「天皇型」の人権思想は「一君万民」の理念に基づく「国賦人権」である。日本の人権は天皇を頂点とする国家から「天皇の赤子」である国民に与えられた権利だが、これでは尊皇愛国より上位の価値は存在しないため、抵抗権は確立しな

い。だから日本の人権は「抵抗権なき人権」なのである(第二部)。

自民党は2012年改憲草案で天賦人権説を明確に否定したが、これは戦前の国賦人権が復活する兆しだという筆者の指摘は重要だ(序論)。

人権の問題は米中対立、民主主義の機能不全、格差、外国人問題、皇室の婚約問題等あらゆる問題に通底する。我々は今こそ「なぜ人間は尊いのか」と、人権の根拠を問い直す必要がある。

(副編集長 杉原悠人)